



藝大の教員たちが、  
日々の研究やレッスンに勤しむ  
「研究室」のなかには  
どうなっているのだろうか？  
なかなか見る機会のない  
部屋を潜入ルポする。

## 音楽学部声楽科・ 大学院音楽研究科 声楽専攻

Department of Vocal Music  
Graduate School of music Vocal Music course

### 研究室探訪

第五回

Visiting the Laboratory

「藝大メサイア」の愛称で知られる  
「メサイア・チャリティーコンサート」。  
二〇一二年（平成二十四）年で六十二回目を迎  
えた伝統あるコンサートの前日練習にお邪  
魔した。

朝日新聞厚生文化事業団と朝日新聞社  
の主催で、東京藝術大学が協力する形で  
一九五一（昭和二十六）年以来続いてきた演  
奏会は、収益は社会福祉事業に充てられ、  
また歳末を飾る行事として多くの聴衆を魅  
了し続けてきた。

G・F・ヘンデル（一六八五～一七五九）  
のオラトリオ《メサイア（救世主）》は、第  
二部最終曲の「ハレルヤ」のコーラスでつ  
とによく知られる。藝大音楽学部声楽科で  
は一年から三年まで合唱での参加が授業の  
一環として義務づけられている。

十二月二十一日の本番を翌日に控えた学  
生、院生の練習のようすを温かく見守る寺  
谷千枝子教授によると、「ソリストの集団で  
ある藝大の声楽科の学生にとって、アンサ  
ンブルを学ぶこと、合唱を通して音楽を理  
解することはとても重要なことです。しか  
もその成果が二千人以上の聴衆の前で披露  
できるのですから」。公演は藝大に程近い東  
京文化会館の大ホールで行なわれ、長い歴  
史と評判のよさから、チケットは毎年早く  
に売り切れになるそうだ。《メサイア》なら  
ではの壮麗なコーラスは、声楽科学生の百  
数十人によるもの。二〇二二年に引き続き器  
楽科古楽専攻の大塚直哉准教授による指揮、  
藝大フィルハーモニアの演奏によるレッス  
ンは迫力満点で、練習とは思えないほど。

四人のソリストは厳しいオーディション



を勝ち抜いた学生・院生により、一流プロへの登竜門ともいわれる。二〇一二年は、いずれも大学院生の渡邊万里奈(ソプラノ)、秋本悠希(アルト)、黄木透(テノール)、山本悠尋(バス)が務めた。

山本悠尋さんは、寺谷教授のもとで学ぶ大学院修士二年。テノール黄木さんとは学部以来の友人だ。

『メサイア』にふれたのは大学に入ってからのこと。長い歴史を誇る『藝大メサイア』の舞台にソリストとして乗れることに責任を感じます。でも今は、緊張よりも嬉しい気持ちでいっぱい。寺谷先生からは『自信をもって歌うように』とアドヴァイスをいただきました。

黄木さん(大学院修士一年)は、音楽学部を受験したときの自由曲が『メサイア』

のなかのアカコンパニアート(伴奏付レチタティーヴォ)だったのでこの曲にはとても思い入れが深いのだという。

「藝大に入学したら一年生のときから、毎年合唱で参加することを知って驚きました。先輩のソロを合唱席から聴いて、自分はいかなるふうになれるものかと……。『メサイア』の全体像は知らなかったのですが、何年も合唱として歌ってきた大曲がもつ物語もだいたい把握できたのではないかと思います。院に進んでからはオペラを中心に学んできたので『メサイア』の芝居の部分も大事にして伝えたいと思います」。

公演の直前にもかかわらず、ソリストばかりでなく、合唱を受け持つ学生が練習を楽しくしているように、音楽科の教育の充実を垣間見た気がした。



器楽科古楽専攻の大塚直哉准教授の指揮、藝大フィルハーモニアの演奏による本番前日の練習は、真剣かつ熱をおびたものだった。